

ロシア・センター開所記念シンポジウム「二十一世紀と宗教」

二十一世紀のコーラン

イスラムと多様性の共通項

E・A・レズヴァン

斎藤ベントツえく子 訳

古典と呼ばれるのは、あたかも宇宙の様に全て考え
尽くされた必然であり、無数の解釈が可能ならぬえ
に、ある民族とか民族のグループが長きにわたって
読むことを決意した本である。

ホルヘ・ルイス・ボルヘス（二）

コーラン——それは人類史において驚くべき役割を果
たした希有な一書と言える。一方において、コーランの
成立過程は紀元後六―七世紀にかけてのアラブ世界の複
雑な歴史的文化的状況のみにとどまらず、それ以前の時

代をも重厚に反映している。他方、コーランのテキスト
を構成しているムハンマドの教えは、当時のアラブの歴
史上、多くの重要な出来事を主導するかたちで大きな役
割を果たした。以降現代に至るまでコーランはイスラム
社会の様々な側面に重要な影響を与え続けている。翻っ
てコーランへのかかわり方、研究のアプローチは、東
洋、西洋とも幾世紀にわたり、それぞれの特徴を帯びて
おり、それは世界を激震させた歴史的、文化的、更には
宗教的動きと関係している。

七世紀初頭の西アラブ。灼熱の太陽と岩の多い半砂漠、ごつごつした褐色の山々、埃っぽい商業都市と開墾されたオアシスの国、遊牧ベドウィン（遊牧アラブ民族）と商いの旅で富を手にしたキヤラバンの商人たちの国。

インド洋、ペルシャ湾、紅海への危険に満ちた航海を成し遂げた船舶が、アラブの港にアフリカ、南アジア、極東からの物資を陸揚げする。物資は商人たちのキヤラバンに積み替えられ、北の豊かな市場を目指して太陽に焼かれた丘陵を幾つも越えての長い旅に出ていく。キヤラバンの道はメッカを通過し、イエメンからシリアへと抜けた。それはビザンチン帝国がエチオピア、インド、中国と結ばれた道だ。

キヤラバンと船舶はアラブに物資と人を運んだだけではなく、書物、思想、宗教をもたらしした。ローマ帝国から亡命したユダヤ人、キリスト教の宣教師、隠遁生活をする僧侶たちがアラブの砂漠やオアシスで説教をした。彼らの多くは異端として追放された者たちだった。数世

に伝えている。彼らは、社会の行き詰まりの原因を間違った信仰と、天から与えられていた掟を破壊したことにあるとして、ムハンマドと同様、社会が抱えている問題を解決しようとした者たちだった。

一見当時の文明世界の辺境に位置する、まさにここ内アジアにおいて、世界史のその後を大きく左右し、ヘレニズム時代とルネッサンス期のつなぎ役を果たすことになる中世イスラム文明の誕生を導いた出来事が起こったのだ。原始アラブ世界の商業と宗教の中心地メッカにおいて、約六一〇年頃、ムハンマド・イブン・アブドラが唯一神への真実の信仰を説く。彼は年齢四十ぐらい、信望厚き、隆盛を誇る商人で、以前は孤児の牧童として、貧乏とさげすみを経験してきた人間だった。

内面的葛藤を経てムハンマドは彼に天から与えられた使命を受け入れる。天啓により、彼は、来るべき「審判の日」と罪人に与えられる罰、真実の信仰者へのアラウの慈悲、その無限の力の人々に告げるためにアラウによって選ばれた使者であることを確信する。

初めての説教は極めて近い者たちの間で行われた。

紀を経てこの頃までには、彼らは埃っぽい市場やベドウィンの宿場の焚き火の周り、またはひんやりした洞窟の中に信者を集めるようになり、そこでは油のランプの薄明かりの下で新参のまだあまり教えの解らない者たちが互いに肩を寄り添って座り聞いていた。アラブ人の文学や彼らの部族の言い伝えの中に、バイブルの伝説、思想、概念が浸透したことにより、原始的神々の権威が失墜し、代わって、他の神々よりもっと力の強い、ある種の最上位の神、創造主という概念が登場してくる。

イエメンの都市、ヘジザのオアシス、北アラブの都市ではユダヤ教とキリスト教の寺院が開かれ、部族ごと改宗したようなそれらの宗教の信徒集団が存在していた。一神教的考え方を持つが、どの宗教にも交わらない人々も登場してきた。彼らは、ハニーフと呼ばれた。そして遂に七世紀には、アラブの様々な地域で、唯一神を説く宗教・政治指導者が一度に何人も出現した。これらの人間たちを「偽預言者」とするイスラムの伝説は、彼らの名前をアリ・アサド、ムサイリマ、トゥライハ、イブン・サイイアド、女性預言者、サジャフであったと今日

程なくしてムハンマドには小さな信者グループが生まれしたが、メッカの住民の多くは彼の教えに敵対的だった。その理由は、ムハンマドはアラブの古代多神教の中心地だったメッカの最も重要な宗教的、文化的伝統を侵害したからだだった。メッカの主要な聖堂カーバは、街の経済的繁栄と強く結びついていた。

六二二年、彼は故郷の街を追われ、後に「預言者の街メディナ」と称されるようになったヤスリッパに移住する。このヒジュラ、即ち聖遷は、ムハンマドにとって自分の部族との最終的決裂と、彼が法の庇護の外に置かれることを意味した。この出来事が、現在約八億の人口が使用しているイスラム歴の起算日となった。メディナでの十年はムハンマドにとって内外の敵との緊張した闘いの連続であり、生死を決するような一つ一つの課題、人々の質問に即座に正確な答えを出していかなければならない日々であった。次第に大きくなっていったイスラム集団は、統制を必要としていた。この時期のムハンマドの教えは、イスラム集団（ウンマ）の生活を規制する宗教的、法制度的規則を網羅している。現在では忘れら

れてしまった当時の何らかの具体的状況に対して説教がなされ、その後の幾世紀の間、それらの言葉は人々によって精読され、その中に秘められた万事に通曉する意味が探されてきた。次第に「本」が生まれていく。それは当初単に預言者自身と彼の弟子たちの記憶に留められ、初めはムハンマドの関与無く未完成で未整理なメモとして、後には彼の直接の指示で編まれていった。まさにここメディナにおいて「聖なる書の持ち主」、ユダヤ教徒、キリスト教徒との決定的訣別がなされ、預言者の教えは独自の発展の道を辿り、独立した宗教体系を持つことになる。

イスラム教徒たちは従来のようにエルサレムに向かって祈るのを止め、聖地メッカに向かい、「アラーの家」カーバに向かって祈りを捧げ始める。斎戒の規則と日々のお祈りの回数が変更された。アラブ固有の宗教・文化的パラダイムに則った一連の儀式上の規則が生まれていった。これによって、ムハンマドを他国の異質な教えを持ち込む者として批判していた彼の敵対者たちは、自分たちの最も重要な批判の論拠を失うことになる。それと

同時にムハンマドの教えと初期イスラム教徒たちの宗教的実践には、ユダヤ・キリスト教的的精神性に源を発する世界観、考え方が受け入れられ、公認されていた。

六三三年初頭、重要な勝利を治め、全アラブを自らの勢力下に統一したムハンマドは、男子の子孫を残さずに逝去し、天との連絡は断たれた。そして、残された教えは一人歩きを始めることになる。

この様に、六一〇年から六三二年までの間に主にメッカとメディナにおいて説かれたムハンマドの教えを集めたコーランは、アラブ史の移行期、即ちアラブ共通の国家体制の成立が進み、アラブ諸部族の民族的結束が完成し、新しい社会・政治情勢を反映させ、かつ社会の直面する問題を矛盾無く解決させうる主要な「手段」となった思想が生まれたそのような時代の様子を伝える、信頼性の高い最古の散文的書物である。

ムハンマドの教えの成功の要因は、アラブ古来の世界観にユダヤ・キリスト教的思想、また一部ゾロアスター教的思想、ササン朝イランの文化遺産を「融合」させた新しい儀式的、社会的実践をその教えの中に確立したこ

とにある。これは、一方において、地中海地域及び中近東の優れて発展した社会に特徴的だった主な諸規範をアラブ社会が受容するのを保証し、他方においては、アラブの近隣諸国の発展に追いつくことを目指していたアラブ社会の最も活発な勢力がこの教えを支持するような性格付けがなされたことになる。

二

ムハンマドの深い確信と、情熱、実践に際しての柔軟さ、皆を納得させる説教は、後継者たちにしつかりと受け継がれた。彼の死後わずか数十年の間に、イスラム軍は、ピレネー山脈からインダス川に及び巨大で豊かな国家を築き、当時の「政治地図」を塗りつぶした。そこでは、アレキサンダー大王以来初めて西洋と東洋が結ばれ、インド・イラン世界が地中海世界と出合った。実際の信仰へ導く預言者の人々への呼びかけは幾千万の信者を誕生させた。

イスラム文明は、いわゆる「無道（ジャーヒリア）」の否定から始まったが、ムハンマドと初期の頃の戒律に

忠実なカリフたちのイスラムは、即ちコーランのイスラムは、それ以前の時代の文化、世界観、伝統との訣別を常にうたってはいたものの、実際それらと幾重にも結びついていた。ところが、八〜十世紀にイラクとシリアで樹立され、アラブによって征服された諸国の多くの文化を吸収した「古典イスラム」と「アラブ的」イスラムとの本質的断絶には、長年研究者たちの関心が届かないままになっていた。アラブが征服に成功したことで、イスラムが新しい発展段階にある社会のイデオロギーとして成長していく新しい時代が始まった。カリフ制の核を成したのは、旧ビザンチン領、ササン朝領の土地だった。新しい信者の間には、従来の宗教、文化的伝統の中で幅広い教養を身につけている人たちがいた。征服地に定住したアラブ人たちは、急速に新しい文化を吸収し、集団で文化的な作業に参加していった。この人々のカラム（盧奔）はイスラム宗教思想の黄金の文庫となり、古典イスラム教の「顔」と思想体系を形成した幾百もの著作を誕生させ、それが中近東の諸民族に受容されていった。

その過程の特徴的なことは、この新しい宗教が本質的には、ビザンチンとササン朝イランを取り巻く「野蛮な辺境」の一部を成していたアラブ社会の特異性と諸問題を反映させて成立した、疑う余地の無い法であるコーランを基礎にしたことにある。そしてまさにこの過程においてムハンマドの説教を試金石とするこの教えは計り知れない順応性（適応性）を発揮していった。

アラブ・イスラムの拡張と同時進行した社会的・思想的变化においては、コーランは社会生活のあらゆる側面で優れた地位を占めた。宗教的教示と社会規範、倫理的、文化的基準の根本となった。コーランは、質的に新しい普遍的共通語をもたらし、イスラム社会のメンバーはその用語を用いて自己と世界を認識していった。コーランの言葉の聖礼化は、カリフ制をとる地域に新しい社会的コミュニケーション・システムをもたらす上で重要な役割を果たした。

ムハンマドの死後まもなくして、コーランだけでは、イスラム社会が直面する多様化していく諸問題に回答を与えきれないことが明らかになってきた。ましてや、イ

スラムが征服した領土であるアラブ・イスラム社会の異質な要請に応えることは不可能だった。このことは、一方ではコーラン以外のイスラム法、特にハディース、即ちムハンマドの言動を伝える伝説の登場とそれらの意義を高める結果を招き、他方においては、コーランの解説が益々文章の直接的意味から遠ざかって「隠喩的（メタフォリック）な解釈を生み、イスラムの様々な流れをくむ信者たちの間では新たな「聖なる書」が生まれることになる。

イスラム文化が被征服民族の文化を広く吸収していったことよって発生したイスラム国家の文化的共生が進むに連れて、コーランを中心とした社会・宗教制度の理論的意義付けも複雑化した。

スンナ、シーア、スーフィー、イスマール各派、エジプト、ホラーサーン、そしてスペイン、インドのムスリムによる様々なコーランの解説書にはそれぞれの政治・宗教上の立場と民族・文化的感情が反映された。

スンナ派の形成の過程で、コーラン解説の独特の方向性が生まれ始めたが、長い期間単独の解説書の登場には

至らなかった。アル・ブハリイのかの有名なハディース

「サヒーフ」には、コーランの解説に当てられた特別な章が含まれている。ムハンマドの生涯を描いたスーラもその多くの部分をコーランの解説に当てている。それらの中では、アーヤートを出来事として捉え、意味の理解しにくいコーランの用語は詩的な引用で説明された。預言者による法的基準と裁可が示されているアイアトは総じて、イスラム法学者にとって、念入りの研究と解説の対象であった。アラブの最初の辞書編纂と文法書もまた、コーランの解説上の必要性と強く結びついていた。コーランについての諸学問が成立していったのは、聖なる本の読誦（アル・クラート）についての教えが発達したことと深く関連し合っている。これは、コーランを主な「奇跡」（ムージザ）であり、主な神聖の示現（アーヤ）、イスラム教の宗教教義の優位性の証明、ムハンマドの預言の真実性の確認（ブルハン）であると位置付けるイスラムの教義体系の成立の一貫として行われた。

これらの諸学問は当初、学問的な区分がはっきりとしていなかったが、その中にコーランの解説をした

特別な作品が登場してくる。それらは、従来の研究の手法とそれまでに蓄積されていた用語を継承している。現代の研究によると、コーラン解釈を文書化する伝統、タフシールは、既にヒジュラ歴二世紀には存在していた。

「イルム アリー・クラン ヴァ・ト・タフシール」が（コーランに関する学問の）ジャンルとして誕生したことは、カリフ制における権力闘争が激化したこととかなり関係している。シーア派の学者たちは、コーランの個別の用語についてスンナ派の理解とは異なる意味と取り方を採り、コーランを比喩的に解釈（ターウィール）し、

母音交替の階梯を組み替え、論理上の強弱を変えることで、アリーとその子孫たちに有利となる注釈を行った。その際、アリー寄りの解説者たちは、彼らの対立者たちがコーランのテキストを歪曲し損ない、幾つもの重要な鍵を握るアイアトを削除したことを罪として咎めた。シーア派では、「二つの天体」と題される第一二五章（スーラ）が追加されたコーランの写本が行われ、後に出版された。

このイデオロギー闘争は、コーランのテキストの文字

どおりの理解と解釈（ザ・ヒル）を支持する人々と、コーランの「秘し」、「隠された」意味（アフル・アル・バーティン）を読みとろうとする人々に社会を分断していく。彼らの論争を背景に、タフシール（解釈、説明）とターウィール（原典、源へ帰る）の概念を巡っての抗争が展開された。シーア派のターウィールの正当性はスンナ派のタフシールの反駁を受けた。アッバス朝が権力の座につき、続いてアリー家への迫害が加えられると、コーラン解釈におけるアリー寄りの傾向は抑圧されていた。それが復活するのは、アリー寄りの政治を行ったマームーン（八二一―八三三）の治世においてである。

同時に、タフシールは南方アラブ、カフタニードと北方アラブ、アドナニードという二つの民族同盟間の激しい競争を反映させていた。この対立関係は七世紀末から八世紀前半にかけて特に激化した。このグループ間の争いは、カフタニードを支持して、「反カリフ」アブダラ・B・アズ・ズバイルに勝利したマルヴァン・B・ハーカムが権力を握ったこと、南フランスにおけるイスラム軍が奮わなかったことなどの、多くの重要な政治的

出来事と結びついている。アッバス朝が比較的容易に権力を手にしたのは、この争いの結果である。そしてカフタニードとアドナニードの拮抗は、多くの点でイスラムの政治史を決定づける要因となった。カリフ制の内部に存在した複雑な民族社会的、民族文化のプロセスは、新しい「コーラン」を生んだ。イスラム教史を通じて、そここにマフディ（導かれた者）を自負する者が出現した。その中の多くは、「聖なる書」を書き残した。

アッバス朝の勝利は、政治と軍事面でアラブ人を排斥することになる。アラブ人の敵対者たちは、アラブの文化的ヘゲモニーに反対するシュウービーヤというイデオロギー運動を統一した。シュウービーヤ運動もまたコーランを拠り所としていた。

社会・宗教制度としてのイスラム教の複雑化は、コーランの解釈が新しい段階に入ることを意味した。理論的イスラム神学、即ち思弁神学（カラム）の初めての本格的な流れをつくったムータジラ派は、個人的思考によるコーランの解釈（アム・タフシール ビルライ）と「合理的ターウィール」を用いた。この実践は、彼らの

敵対者たち、殊に、ムスリムの伝統であるハディースに依るコーランの解釈（アト・タフシール ビル・イールム）を主張するハンバル派からは不法と見なされた。ムータジラ派としては、自らの主張の拠り所をコーランに置いていた。彼らは、神の属性を認めないことをはじめとして、神の正義（アリ・アドル）と神の唯一性（超越性）（アム・タウヒード）に矛盾する部分を、「理性的論拠」に基づいて全て解釈し直した。

このような幅を持った自由な解釈、本質的にはテキストと解釈の差し替えともいえる手法は、同じアーンヤートが相対立する二つのグループによってまったく逆の解釈がなされて使われるといった事態を生み、それは当然ながら反発を呼ぶことになる。コーランの注釈を好ましくない、もしくは禁止されるべきだという考え方が登場してくる。この考え方は、コーランに注釈を加えることに反対の立場をとり、神聖なテキストを恣意的解釈とすり替えてしまうことの危険性を見て取ったかに振る舞ったカリフ、ウーマル一世の権威によって強まっていた。

その後の両者の対立は、「創造されたコーラン説」と

「創造物ではないコーラン説」との論争に集約されていく。そしてこれらの論争は、カリフ制内部においての深刻な政治紛争を反映させたものだった。

カリフ、ウーマル一世の権威の庇護を受ける人々は、コーランの解釈の可能性を否定し、彼らに近い立場をとる「直訳主義者」は、コーランは創造されたものではない神の言葉（ガイル マフルーク）で、神の存在の永遠なる属性であり、何者によっても変更されることはないという立場をとるようになった。ムスリム共同体はこの神の永遠の一書に記されている定めのみ従うべきである。コーランに示された不変の意志を理解する上でその権威を広く認められていたのは宗教学者層ウラマーだったことから、コーランの非創造説と永遠性は彼らウラマーの影響力と権力を客観的に高めることになった。

反対に、コーランを最も自由に解釈した人々は、ほとんどの場合、権力の性質とあり方についてシーア派寄りの考え方を持っており、ムスリム共同体の指導者は神の靈感を持っているべきだと主張した。神とのつながりを持つ為政者は、従来の宗教法を覆す権利を有する。コー

ランは創造された（マフルーク）とすれば、神がそれを再び創造する可能性を認めるべきである。この考え方は、ウラマーの政敵であり、世俗権を代表者する人々の立場を強化した。

「創造されたコーラン説」と「創造物ではないコーラン説」との論議は後者の勝利に終わり、それによって、スンナ派イスラム教の教義体系の基礎を成すものとしてのその立場を確固たるものにした。つまり、ムスリム社会生活上の永遠の変わらざる指針としてのコーランの役目を確立したと言つて良い。

政治場裏へのイスマール派の登場は、コーランのイスマール派解釈が策定されたことによつて特筆される。ターウィールの手法を幅広く利用しつつ、イスマール派はコーランの中に、自分たちの政治闘争手段の正当性と組織上の特徴、ダーイーによる布教・宣伝の必要性、秘密階層制度の重要性等々の裏付けを見出そうとした。箇々のアーヤートと概念（その多くは、地、天、山、木々を意味する用語）について比喩的解釈を加え、彼らは、コーランのテキストを自らの秘教的宇宙観と救済

の教えの真实性を証明するために利用した。

彼らの論に依れば、預言者のメッカでの説教は、新ブラトン派に基礎を置く理想と様式に満たされていた。この考え方は、「純粹な兄弟たち」（イフワーン・アッサファ）に属する著者たちの見解の中に初めて示された。コーランを拠り所とすることは、思想上、学問上の立場を打ち立てるための必要条件であった。しかし、理論的イスラム神学（カラム）が、それが扱える事象の範疇において、コーランの比喩的象徴的解釈（アム・ターウィール）に基づく独立した哲学的知識として発達していったのに対し、ムスリム哲学（アリ・ファルサファ）の方は、それとは反対の方向性を辿った。即ち、出された結論は、事前にターウィールの手法で解釈された聖なる書との形式的な整合性が図られた。

イスラム神秘主義、即ちスーフィズムの代表者たちは、「精神的ターウィール」という概念を提唱した。彼らは、直訳上の意味からかなり離れた自分たちの解釈に對しての根拠を、当時權威を持っていたイブン・アッバースとシーア派イマーム、ジャフイル・アス・サー

ディークに求めた。「精神的」、神智学的ターウィールの支持者たちは、各アーヤートもしくは文字に、「表面的意味（ザ・ヒル）」、「内面的意味（バーティン）」、「限られた意味（ハッド）」、「優越した意味」または「無限の意味（マームーラ）」の四つの意味を見出していた。この理解は、キリスト教の聖書釈義学における *historia*, *allegoria*, *tropologia*, *anagoge* に酷似している。

内面的意味はスーフィーが神秘的恍惚状態に滞在することによって会得された。その終末論的認識にあつては、伝説的ストーリーもしくは意味不明瞭な言葉が使われ、それらが複雑な連想を引き起こした。そのようなひらめきは、しばしばイスラム神秘主義に新たな理論的、実践の規定を生み出していった。

教条的イスラム神秘主義においては、ターウィールがある種の哲学手法となった。これは、特に、もともと神秘的、哲学的コンセプトがアーヤートの比喩的解釈を用いて説明されている、イブン・アラビーとアリ・カシャニの著作の中に顕著に表れている。その場合のアーヤートの比喩的解釈は、往々にしてそのアーヤートのもともとの

意味と正反対の解釈であることが多かった。スーフィーたちの著作の中では、宇宙そのものが巨大なコーランであると捉えられた。そして、その「隠喩」と「記号」は神の啓示に拠つてのみ理解されるとしている。ターウィール、即ち「原典への回帰」、存在の根本に立ち返ることが、認識の方法となつていった。

社会、政治的側面が複雑化したことと、イスラム教内部に新しいイデオロギーを持つ教えが発生したことにより、コーランの解釈はますますその文字どおりの意味から遊離していった。新しい解釈は、本質的には、新しい天啓になつていった。イスマール派のイマームはしばしば「クラーン・イ・ナーチク（話すコーラン）」と称され、コーランそのものは、（解釈が必要なことから）「クラーン・イ・サーミート（沈黙するコーラン）」と言われた。イスマール派、シーア派、イスラム神秘主義のターウィールは、原典のテキストを解説とすり替えている場合が少なくない。「神の啓示としての解説」が美しくイラストされているものとしては、バード教の名祖（なおや）兼、開祖である、シーラーズ生まれのアリ・ム

ハンマド（バーブ）（一八一九—一八五〇）の著作が挙げられる。

三

十九世紀の中頃に始まり現在まで続いている、イスラムの宗教・哲学上、及び法律上の基準を新しい歴史的環境に順応させるプロセスは、キリスト教の宗教改革とは本質的に異なるものの、用語としては「イスラム宗教改革」と呼ばれている。イスラムの宗教改革は、世俗生活の様々な側面における宗教的モティベーションを数多く見直すという形で表現され、神学的問題にはほんのわずかしが触れられていない。また、イスラムではいわゆるキリスト教のような教会及び聖職者が不在であり、それがイスラム宗教改革の性質を根本的に規定したと言える。

十九—二十世紀にかけてのイスラム教の宗教的刷新の過程は、西側世界の科学・技術の成果を吸収しなければならぬという課題と顕著に関係していた。これに際しては、伝統的文化と精神的価値が新たな基礎の上に復活

されなければならないという課題が設定された。この方向性を進む上で、改革・刷新主義と伝統主義という二つの基本路線が明確化していった。

イスラム宗教改革の聖書釈義学は、相変わらず、従来のムスリム社会の在り方と新たな現実との間に生じる摩擦、衝突を反映していた。コーランの解釈を通じて、新しい釈義学者たちは、一方では新しい学術成果や社会観をコーランが預言していたものであるという捉え方をし、それによって聖なるテキストの權威を失われるのを防ごうと試み、他方においては、現代科学の諸概念を、伝統的宗教・哲学の価値体系の中に整合性を持たせてしめるべく位置付けた形で、幅広いムスリムの読者層に提供する努力を行った。新しい釈義学者たちは、解釈に際して、古典的解釈法の伝統に従った。例えば、アミン・アリ・フリ（一九六五年没）は、アル・ガザリー（一一一一年没）の著作の中に既に科学的コメントの原型（アム・タフシール・アリ・イールム）を見出すことが出来た、アポ・ラジ（二〇〇九年没）の有名なタフシールには当時の自然科学分野の成果が有機的に含まれていると主張

した。幾世紀にもわたって蓄積されてきた比喩的解釈は、改革派の釈義学者たちに方法論という重要な手段を提供することになる。アヤート（六—三八）の一節に「我々はこの本の中で何も見落としていない……云々」とあることを根拠として、新しいコメンテーターたちはコーランに全てを見つけることが出来ると論証する。そして、実際に、アリ・カヴァキビ（一八四九—一九〇三）や、タンタヴィ・ジャウハリ（一八六二—一九四〇）等の著作には、反植民地主義的、もしくは反唯物論的論争に始まり、細胞や太陽系の成り立ちを分かり易く説明した学術的記述に至るまで、あらゆる多様な資料が盛り込まれている。

民族的意識と民族解放運動の高まりと共に、イスラム教のスローガンが政治闘争に幅広く使われるという形で、イスラム教は更に政治色を強めていった。

反植民地主義行動の参加者たちは、しばしばメシア思想にはしり、自分たちの指導者をマフディであると宣言した。十九世紀、イスラム神秘主義同盟が政治闘争に積極的に参加し始めた。

ムスリム諸民族の植民地的立場からの解放、世界の二極化、そしてイスラム諸国の金融・経済面での独立は、イスラム社会の世論の中に全く新しい課題を提示してくる。いわゆる「第三の道」と呼ばれる数多くの概念が登場する。

M・アブドゥーとラシード・リダーは、彼らの有名な『タフシール・アリ・マナール』誌（一八九八—一九三五）の中で、自由と改革の精神に基づいたムスリム社会の構築原理を提示した。のちに、アイアート42—36/38の「……彼らのことは、彼らの間の話し合いによって……」という一節を引いて、新しい釈義学者たちはムスリム社会に民主主義が必要だと主張した。「イスラム社会主義」の様々な流れを支持する人々は、コーランの中に社会主義を予見する文言を見出している。イスラム革命と「第三の道」のイデオログであったサイイド・クウトブ（一九六六年死刑）は、「ムスリムの兄弟」という社会的プログラムが正義であることはコーランによって認められているという理念を掲げたタフシールを打ち立てた。コーランは、相変わらずイデオロギー闘争の中で常に

論拠として使われ続けている。イランのシーア派指導者たちも、「リビア革命」のイデオログたちも、そして数多くの過激イスラム組織や運動の代表者たちも例外ではない。また数多くの論文、モノグラフの中で、コーランの記述は、「第三のイスラムの道」の可能性を裏付けるために、現代の社会思想、経済状況との相関において分析されている。

現代のレベルにあわせた「コーラン哲学」を樹立する試みが行われている。アッバス・マフムダール・アッカード（一九六四年没）は、まさにその様な目的を持って、多くの著書を発表している。

コーランの表記、伝説、物語は、アラブ文学の中で新しい響きを持つようになる。最近ノーベル文学賞を受賞したナギブ・マフフーズの「近所の子供たち」という作品を思い起こしてみたい。これも、本質的には一種独特のコーランのターウィールと言ってよい。作品には、カイロの住民として、アダム、ムーサ（モーセ）、イーサ（イエス）、ムハンマドが登場する。彼らの人生と闘争の歴史にはコーランの伝説と言えが使われている。彼

らは人々に幸福をもたらそうとするが、師匠たちの努力はそのたびごとに弟子たちによって台無しにされてしまう。著者は、幸福を人々に与えるのは科学だという結論に達するが、その科学も無力を露呈する。科学の成果が、前代未聞の大量殺戮兵器を造り出し、人間に害を及ぼす形で使用されていく、というストーリーだ。

「コーラン関連」の現代的イスラム釈義学と文学を分析していくと、「進歩的」と「保守的」の境界線、「今日的」と「時代遅れ」との境界線が常時動いていることが解る。コーランの思想と概念は新しい内容で満たされ、新しい必要と受容に応じて見直しが行われている。一方、元来のコーランの概念と思考の多くが、より現実味を復活させてきている。

コーランからの引用が広くマスコミを通じ、政治家によつて使用されている。それらは、視聴者に多様な連想を引き起こし、それらが使用されたことで、一定の反応がプログラムされていく。一九六七年、イスラエルの攻撃が始まった直後、カイロの家々の壁には、信仰の為の戦争（ジハード）についてのアーヤートが貼られ、愛国

主義的スローガンの役割を果たした。有名な朗読家（カリ）の声でコーランが録音されたレコードやカセットが大量に世に出ている。コーラン朗読コンテストが国内、または国際的に開催されている。ムスリム社会とその生活の中でコーランをどのように位置付けるかという問題をめぐるイデオロギー闘争全体が、今も昔も変わらず、イスラム国家における世俗権と聖職権の役割に関する広範な論議を映し出していると言えよう。そして、これを助長しているのが、タフシールの持つ新しい環境への「適応性」なのだ。

現代ロシアの本格派作家の一人であり、ロシアペンクラブの会長を務めるA・ビートフは、最近のインタビューに答えて、「私は、調和を心がけている。朝起きて、バイブルとコーランとプーシキン、パスカル、ダリを数行読む時間がとれた日は、一日を幸福に過ごせる」と述べていた。プーシキン、ゲーテ、プーニン、そして、ボルヘス、その他多くの時代と民族を異にする作家、詩人たちがコーランに関心を抱き、数多くの作品の中にコーランの影響が残されていることは、ムハンマドの説

教がどれほど力強い創造的刺激に溢れているかを雄弁に証明している。世界の多様性と一体性の中にその偉大さを悟った預言者は、彼の言葉を聞く者たちに「宇宙の調和の余韻」を感じさせたに違いない。そして、その余韻は今日も続いている。

イスラム教は、古代より存在し、預言者の時代にはアラブ世界に深く浸透していた多くの宗教的理想を概念が融合した結果として誕生した。後にこの宗教は、中近東の諸民族が持っていた宗教的、文化的遺産の究極的要素を「吸収」する能力を有していたおかげで、アラブ世界を超えて発展し、内実を高めていく。それによって、イスラム教は、驚くほど、多面性を有するようになり、ムスリム諸国が急激に衰退していった時期においても、容易に極東からインドネシアにかけて流布していった。今日も、ネグロ・アフリカ、アメリカ黑人系住民の間に活発に浸透を続けている。

二十一世紀においても、イスラムは、その教えの持つ内面的アルゴリズムと多面性、多様性に支えられて、新たな発展を遂げ、流布を続けていくことだろう。

検証してきたように、コーランはイスラム思想体系の中核を成し、その解釈を通して生き、発展し続け、今日も地上の最も貴重な「本」の一冊である。

ある日、ベネチアの教会のフレスコ画に感銘したロシアの作家、ノーベル賞受賞者、B・L・パステルナークは、「例えば、バイブルは固定された文章を持つ本と言うよりは、むしろ人類のメモ帳なのであり、全ての永遠なるものはその様なものである、と私は理解した。それは、それが義務ではなく、それが発信された時代が顧みるべきあらゆる比較、比喩を感受するときに、生きていると言える」と書き記した。おそらく、コーランは、バイブルに勝るとも劣らず、「人類のメモ帳」として二十一世紀に生きる人々に活用されていくであろう。

(E・A・レズヴァン、ロシア科学アカデミー

東洋学研究所副所長)

(訳・さいとうベンツ へくこ)

〔編集部〕表記は出来るだけ言語の読みを尊重したが、あまりに広く使われている語(例)コーラン(本来はクルアーン)、

メッカ(同マッカ)、メディナ(同マジナ)等はそのままにした。

(本稿は一九九七年五月三十、三十一日に行われた当研究所口シア・センター開所記念シンポジウムでの講演原稿です)